



発刊にあたり — 「地域」と連携する博物館 —

高知県立高知城歴史博物館は、旧土佐藩主山内家から県に移管された約七万点に及ぶ資料群を、保存・調査・公開することを事業の一つの柱としています。その一方で、高知県が設置した地域博物館としての役割も期待されており、その使命の一つに「歴史や文化を活用した地域振興・観光振興への寄与」を謳っています。それを担う一課として設置されたのが「地域企画課」で、地域連携や市町村文化施設支援に特化した事業を展開しています。

「地域」という単語は、今や一種の流行語であります。改めて我々が寄与・連携していく「地域」とはと考える時、ある社会科学専攻の学生から聞いた、「地域」解釈が大きなヒントになりました。「地域」とは、対象とする空間や集団によって、またそれらの関係のあり方によって変幻自在に変化できる、実に有効(便利)な用語であるというものです。

我々は、ややもすると固定化した空間として捉えがちな「地域」を、主体的な問題意識によって、様々に設定できる実践的領域として、暫定的に解釈する方法を手に入れたのです。

問題は、課員から湧き出する問題意識と実践提案を、博物館として如何に体系つけて行くかです。地域企画課が発刊している「地域の歴史と文化の？」に、高知城博が答えます！「なるパンフレットには、資料の保存や調査への協力・歴史文化活動への協力・地域文化の紹介・歴史文化情報の保存と公開といった四つの柱と、十一の活動事例をまとめていますが、それは年々拡大方向で変化しています。今は体系化という結論を急がず、試行錯誤を重ねる段階だと考えています。

今後、年に三回、実践事例や参考情報を報告いたします。大方のご意見やご教示をいただければ幸いです。

(館長 渡部 淳)

城博の活動

南国市国府地区の調査

南国市の国府地区(国分・比江・左右山)は、古代には土佐国府や国分寺が置かれ、中世は長宗我部氏の直轄地でした。明治時代以降は、町村制により国比左村から国分村を経て、戦後の市町村合併により、後免町、南国市の一地区となりました。戦後は農業経営の多角化や高速道路の開通、工業団地の開発など、地域のあり方や風景が急速に変貌しています。当地の歴史的重要性を再確認し、後世に伝えていくことは我々の使命です。令和六年度に歴史と民俗、社会経済の分野を中心に調査し、報告書としてまとめる作業に着手しました。

調査には、当館をはじめ、高知県立歴史民俗資料館、南国市教育委員会、高知大学人文社会科学部が参加しています。また、地元の国府史跡保存会、南国史談会などの協力を得て、地域の歴史文化を総がかりで研究する体制で実施しています。それぞれの担当が異なる視点で見つめる「地域のすがた」が楽しみです。(嘱託調査員 黒石 哲夫)



熊野神社での調査の様子

地域の取り組み

「いの史談会結成50周年記念事業」  
「成山村」記録集作成

いの町の旧成山村は土佐和紙の里として、七色紙伝説や土佐藩御用紙漉制度にまつわる史跡や伝承が今に残る山村です。しかし、現在では30人ほどが暮らす過疎集落となり、貴重な歴史が忘れ去られようとしています。

「いの史談会」は、地元有志の方々が結成した歴史研究会で令和六年に発足50周年を迎えました。会では、記念事業として「成山村」の地域記録集を令和六年八月に発刊し、報告会を開催しました。今後は、現地見学会の実施を予定しています。

当館では、10年ほど前から大きく変容しつつある地域を対象として江戸時代の村単位で調査研究を行い、「○○村地域記録集」という冊子にまとめる活動をしています。「いの史談会」の記録集作成は我々の取り組みを参考に「中津川村」の刊行に続くものです。今後も、より多くの「地域記録集」が地元の人々によって作成されることを期待しています。(黒石 哲夫)



地域記録集「成山村」(表紙)

# 地域の調べ

## 地名調査と地検帳



今日、地域の資料や伝承などを調べる際、その事柄が起こった場所を特定することは、欠かせない作業です。しかし、明治時代以降の市町村合併や都市開発等によって、当時の地名が失われていることは珍しくありません。そのような中で威力を発揮するのが『長宗我部地検帳』（三六八冊）です。長宗我部元親の実施した土佐国検地の記録であるこの土地台帳は、当時の田畑や屋敷地に誰がどのように関わっていたのかが書かれており、戦国大名の権力構造や地域に暮らす人々の重層的な社会構造などを解き明かす好資料となっています。地名に関しては、田の一枚一枚に「ホノギ」と呼ばれる地名が記されており、失われてしまった、あるいは地名辞典でも確認できない地域の地名までを知ることができます。今日、失われた地名の中には、例えば、過去に何度も災害に見舞われたことから、子孫への警鐘として洪水や崩落などを連想させる文字を含むものがあります。つまり、地名を守るということは、往古の資料解読にとどまらず、今の私たちの社会にとっても重要な意味を持つのです。



『長宗我部地検帳』  
(国重要文化財・高知県立高知城歴史博物館蔵)

(主任学芸員 片岡剛)

# 地域の言葉

## 「用水」



灌漑・飲料・工業・発電から消火や洗濯に至るまで、潤沢な水を確保し、且つ、平等に分け合うシステムは、地域安定の必須条件で、そのバランスが失われると、時に命をかけた抗争に及ぶこともありました。村役人を勤めた家や地区の集会所などに土地関係文書と並び、用水に関する文書や絵図が多く残されているのは、そのような理由があるからなのです。長閑な田園風景の背景には、水をめぐる人々の熾烈な歴史があることを忘れてはなりません。

用水の調整は、村内部に止まらず、河川の上流・下流の村との交渉も不可欠です。その過程で作成された文書は、広域地域資料としても重要です。ちなみに、香川県の水環境を支える香川用水は、高知県の山中長岡郡にある早明浦ダムからの取水によるもので、この七月、通水五十周年を記念する式典が高松市で開催され、翌月には香川県の首長や行政関係者がダムを訪れ、水源地への感謝の気持ちを表しました。

(渡部淳)

# 図書室



## 大野晃「限界集落と地域再生」

(高知新聞社他 二〇〇八)

「過疎」という言葉が使われ始めたのは、都市人口の「過密」を主題とした国の会議の席上、島根県のある町長が発言したことがきっかけと言われます。昭和四四（一九六九）年のことでした。一方、「限界集落」なる概念は、高知大学で山村経済を研究していた社会学者大野晃の論考に淵源を發し、それは「山村環境社会学序説」で世に問われ、本書で一般に広く知られるようになりました。大野は、地域人口の五〇％以上が六五歳以上で、若者の流出が続く、冠婚葬祭などの社会的共同生活を維持することが限界に近づきつつある集落を限界集落と名付けました。過疎化の進む地域把握の概念として注目され、自治体の政策にも大きな影響を与えると同時に、刺激的なその言葉が一人歩きし始めたときもありました。

その後、論の批判的検討、「限界論」の克服なども提唱され、様々な集落論が展開する大きな契機となった著作として、今尚見返されるべきものといえます。

(渡部淳)

# お知らせ

- 地域文化講座〈第2回〉  
日時：令和6年10月5日(土) 13時30分～15時  
内容：地域調査法「神明細帳を読む」  
講師：渡部淳(高知城歴史博物館館長)  
その他：〈会場〉黨の会館(黨的神社境内)／〈定員〉40名(要事前申込・先着順)  
※電話・FAXにて申込受付(Tel: 088-871-1629/FAX: 088-871-1619)
- 第8回お城下文化の日  
日時：令和6年11月17日(日) 11時30分～16時  
内容：高知市中心部の文化施設でつくる「お城下ネット」のイベント  
ミニ展示や工作教室、体験コーナーを開催  
会場：帯屋町2丁目アーケード・オーテピア多目的広場等  
主催：高知お城下文化施設の会(お城下ネット)  
※詳しくは10月中旬頃に当館のHPやチラシ等でお知らせします。

# 活動日録

- 4月 ●高知大学朝倉キャンパスにて南国市国府地区総合調査協議  
●相談窓口対応(2件：安芸市・梅原町)
- 5月 ●南国市国府地区総合調査(熊野神社)を実施  
●南国市立国府公民館主催「ふれあい歩こう」会へ参加  
●相談窓口対応(2件：津野町・高知市)  
●高知県史編さん室「資料調査隊養成講座」へ講師派遣  
●「城博のGW」イベント開催(土佐材ワークショップ、土佐茶のふるまい、土佐のあれこれ紹介コーナー出展)  
●こうちミュージアムネットワーク事務局 総会出席
- 6月 ●南国市国府地区総合調査(熊野神社・国府地区集会所)を実施  
●高知SGGクラブ共催で土佐文化紹介講座(外国人対象)を開催  
●「地域学芸員」養成講座 第1回を開催(県内3カ所)  
●「高知に関する研究・文献目録一令和三・四年度一」刊行
- 7月 ●地域文化講座 第1回を開催  
●「地域学芸員」養成講座 第2回を開催(県内3カ所)  
●目録編成支援について相談対応(津野町郷土資料館)  
●高知まちゼミ実行委員会主催の親子まちゼミへ参加  
●高知お城下文化施設の会事務局 総会出席

# 地域企画課だより 第1号

発行日：令和6(2024)年9月  
編集・発行：高知県立高知城歴史博物館(地域企画課)  
〒780-0842 高知県高知市追手筋2丁目7-5  
TEL: 088-871-1629 / FAX: 088-871-1619  
HP: <https://www.kochi-johaku.jp/>

